第37回 住まいのリフォームコンクール

# 国土交通大臣賞　【住宅リフォーム部門】

| | |
|---|---|
| タイトル | 掛軸の家 ―引き継がれる家族の物語― |
| タイプ | 持家一戸建 |
| 構造 | 在来木造+伝統工法 |
| 設計会社 | (株)田口建設 |
| 施工会社 | (株)田口建設 |

## リフォーム前後の写真

屋根や外壁には、セメント素材から湧き出す白華（エフロレッセンス）をあえて抑えずに1枚 1 枚異なる温かみのある窯業系の素材とすることで、既存の躯体との調和を図った。建物正面の下屋部分には米ヒバ（白木）を張り込み、古材とのコントラストを作ると共 に、時の経過を楽しめるものとした。上部外壁は左官吹き付けにより、掛軸に残る、色鮮やかな青をアクセントとして復元した。

既存 160 角土台基礎。2 階階高を確保するため段差を設けた。

洗面所・洗濯・脱衣・WIC を 1 つの空間にまとめ利便性を高めた。

WTC と子供部屋として利用する寝室 2 ・ 3 は動線の自由度や通風を考慮し回廊型プランを採用した。

屋根の勾配に合わせた引き戸を製作した。将来子供部屋として二分割で利用可能。

小屋裏の余剰空間を小屋裏収納として利用。

大梁を受ける柱は大壁とし、荷重の少ない柱を束しとして、4 枚のサッシ + 古材 + 新材を構成した 1 つのシンボリックな開口部を 3 カ所設けた。上部は電動開口窓により、夏場の暖気を自然換気する。

伝統工法の小屋梁を現しにした開放的な空間には、床暖房 + シーリングファンを完備し、冬場均一な温度分布となるよう配慮した。

貫火により梁の表面が炭素化しているが、十分な燃え代があることから、痕跡をそのまま残し現しとした。

空撮影により掛軸と対比

## リフォームの動機／設計・施工の工夫点／施主の感想・満足度／住宅の価値を向上させた内容など

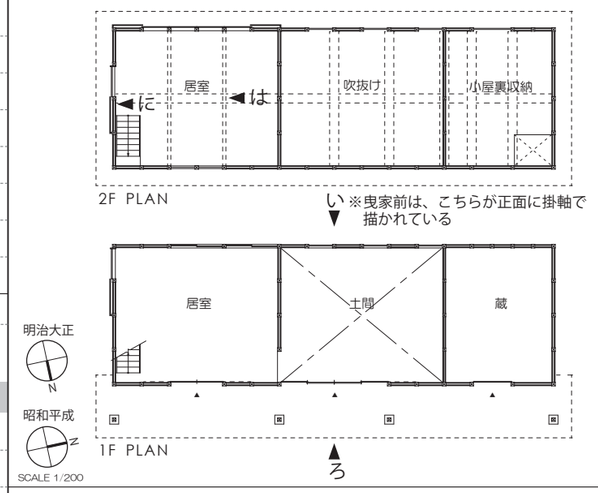
南埼玉群岩槻町（当時）明治拾参年 辰 壱月（1880 年）。この建物は、茶農家の奉公人の住まい（長屋門）として築造された。母屋の床間に掛けられた 1 幅の掛軸には当時の情景が描かれ、色鮮やかな建物が窺えた。ご子息より今回の計画のご依頼を頂いた時は、農機具庫として使用されており、雨風が吹込む、人が生活できる環境ではない状態だった。伝統工法の建物ではあるが、過去に曳家を行った際、布基礎に替わり、建物の方位も変わっている。貫火により傷んだ柱梁の入れ替え以外は既存の躯体を活かした。躯体の層間変位が大きいことから、耐力壁により耐震性能を高め、断熱、室内環境を考慮することで、小屋組みのある大空間や連続的な空間構成を可能とした。当時の職人の手仕事の痕跡から数多くのことを学びながら、随所に過去のコンテクストを落しと込み、本来の建物の持つ空気感を蘇らせた。明治～令和、当時の職人から受け取った襷をまた次の世代（50 年後 100 年後）へと繋ぐことが出来ればと願っている。

| 性能向上の特性 | 特に配慮した事項 | lw 値 | |
|---|---|---|---|
| 耐震性能、耐久性能、断熱性能、室内空気環境 | 住環境を向上させるだけでなく、過去の記憶を随所に落とし込み、引き継がれて行く家族の物語を大切にした。 | リフォーム後 | 1.64 |

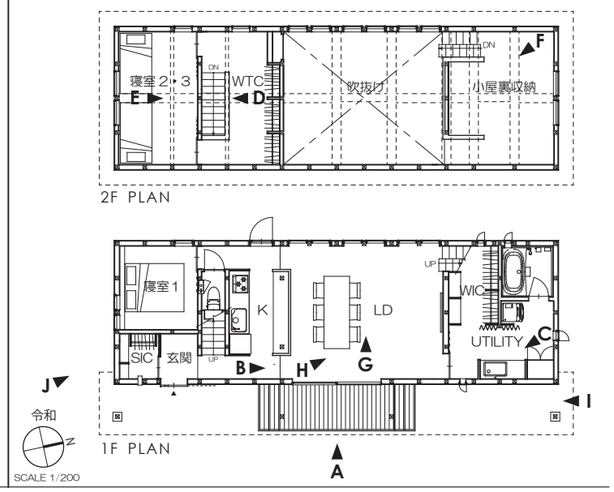
## データ

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 所在地 | 埼玉県さいたま市 | 新築竣工年 | 1880 年 | 築後年数 | 140 年 | 施工期間 | 150 日間 |
| 該当工事床面積 | 107.6 ㎡ ／総工事床面積 | 107.6 ㎡ | 該当部分工事費 | 2300 万円 | ／総工事費 | 2300 万円 | |
| 居住者構成 | 65 歳以上：0 人 ／ 15～64 歳：2 人 ／ 15 歳未満：1 人 ／ | | | | | | |

## リフォーム前の平面図




## リフォーム後の平面図




リフォーム部位 ： ■居室/ ■台所/ ■浴室/ ■便所/ ■洗面所/ ■廊下/ ■階段/ ■玄関/ ■エクステリア/ □マンション共用部分/ ■その他

# 国土交通大臣賞　【住宅リフォーム部門】

| タイトル | 掛軸の家 ―引き継がれる家族の物語― | タイプ | 持家一戸建 | 設計会社 | (株)田口建設 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 構造 | 在来木造+伝統工法 | 施工会社 | (株)田口建設 |

## 講　評

この建物は140年ほど前に岩槻（現在：さいたま市）に建てられた「長屋門」であり、建物の用途としては茶農家の奉公人の住まいでもあった。その後、曳き家があって位置や方向が変わるなどの変化もあったが、その際に従来の基礎から布基礎への改修なども行われた模様である。こうした記録からは、この建物が、長い年月にわたって大切に使われて来たことが伺われる。ただし今回のリフォームの計画に際しては、この建物は農器具庫として使われていていたとは言え、近年の状況では風雨が吹き込むなど、とても人が生活できる状況ではなかったとのことである。

こうした建物を再生・活用するため、損傷の大きい箇所以外での既存躯体の活用や、耐震性能の強化や断熱性能の向上などを考慮したリフォームが計画された。一般的な考えでは、現代的な設計で建て替えやリフォームを考えるのが一般的であり、そういう方法によれば、時間的にも費用的にも「効率よく」リフォームが実現したであろう。

しかし今回のリフォームでは、改修前は居住スペースではなかった建物を、現代の生活に相応しい居住スペースとして改修するための大幅な改善が実施された。特に、既存の構造体を出来る限り利用して、当然ながら必要な補強を施し、確実な耐震性の確保を基本とする構造が求められた。その結果、すっきりした外観や、小屋組を見せる大空間など、連続性のある空間構成が実現され、現代の生活に相応しいモダンで快適な居住空間に生まれ変わっている。

具体的な改修の例としては、エフロレッセンス（セメントを用いた材料の硬化後の表面に発生する白い綿状の結晶物）を敢えて抑えず１枚１枚異なる窯業系材料で既存の躯体との調和を図ること、建物正面下屋部分に於ける米ヒバと古材とのコントラストや時間的な変化も楽しむこと、更に外壁上部には左官吹付で鮮やかな青のアクセントを付けること、などの様々な工夫が施されている。

また、伝統的建築の良さを残しながら居住性能を確保することも考慮されており、伝統構法の小屋組の構造美を生かすべく、屋根の軽量化や壁面の軽量化と美観を両立させる努力なども行われている。この建物の快適性や伝統的デザインなどには、居住者からも十分な満足が得られている模様である。

以上のようにこの作品は、伝統構法の力強さを存分に生かしながら、現代の機能および快適性を十分に実現し、現代の快適な生活に相応しい居住性やデザインなどを遜色なく実現している。一般的に見られる「古民家リフォーム」とは、ある意味で一線を画したとも言うべき「伝統構法の現代的解釈」の好事例と言って良い作品である。こうした様々な「ディテールの遊び」をちりばめながら、今後とも長い時代に亘って伝統とモダンさが両立する、まさに現代の伝統構法と言える作品である。

歴史と伝統を重んじながらも、現代の生活様式の実情を見事に捉え、生活の利便性・快適性などを存分に生かしたこの作品は、国土交通大臣賞に相応しい優れた作品である。